



揺るぎない 社長の信念こそが 壁を越える力になる

事業には、強い信念が必要だ。いま注目される、この2人の起業家も、大きな壁にぶつかってきた。1人は10年にも及ぶ開発を続け、もう1人は人の問題で倒産寸前に追い込まれた。共に揺るぎない信念があったからこそ、その苦境を乗り越えられたのだった。

ソニーやアップルのようなかっこいい企業になりたい

セブン・ドリーマーズ・ラボラトリーズ株式会社

代表取締役社長 **阪根信一**



消費者が喜ぶ製品を生み出し社会貢献する

洗濯したものを放り込めば勝手に畳んでくれる、世界初の全自動洗濯物折り畳み機「ランドロイド」。今やさまざまな媒体や企業から注目を浴びる、この夢の家電がもうすぐ実際に発売になる。

「世の中のないモノを創り出す技術集団」セブン・ドリーマーズ・ラボラトリーズは阪根信一さんが家業の株式会社I・S・Tを継いだ後、スピンアウトさせて設立したベンチャー企業だ。「世の中のないモノ」「人々の生活を豊かにするモノ」「技術的なハードルの高いモノ」という三つの「クライテリア（基準）」を設定し、すべてをクリアするアイデアのみに挑戦する。

アメリカの大学で博士課程まで修了した阪根さんだが、「天才」がひしめくアメリカで自分が研究者として頭一つ抜ける自信は持てなかった。そこで、研究者になりたいと一度は固辞した父の会社を継ぐために帰国。すぐに開発に着手し

て完成させたB to Bの医療用製品が思いの外ヒットし、高収益に。会社を正式に任されるようになって、利益を次の事業用の研究開発費に投じることとした。その際、B to BからB to Cへの転換を図る。なぜなら、B to Cで一般の消費者が喜ぶイノベーションな製品を生み出すような、社会貢献をしたいと考えたからだ。

「企業イメージとして頭にあったのはソニーやアップル。かつて自分がソニーのウォークマンやアップルのマッキントッシュに触れて、かっこいい！欲しい！と直感的に感じたように、斬新な発想や最先端の技術に支えられた商品が魅力的なデザインやブランドイングによって、さらに特別な輝きを放つ「ランド」を作りたい、と思ったんです」

ソニーやアップルのようなかっこいい企業になる、という壮大だが極めて素朴でシンプルな目標を掲げることは、実はとても重要な心が折れそうな時や妥協しそうなとき、シンプルだった初心を思い返し、自身を奮い立たせる鍵